
のだめカンタービレ雑記～書かれなかった物語、ミルヒーの視点から

杉山邦夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「のだめカンタービレ雑記」書かれなかつた物語、ミルヒーの視点から

【Zコード】

N2240Q

【作者名】

杉山邦夫

【あらすじ】

「のだめカンタービレ」に関するエッセイ。ミルヒーことシユトレーゼマンの視点から、書かれなかつた物語を読み取っていきます。のだめファンによる、のだめファンのための、のだめをより深く理解するためのエッセイ。

一言で言えば、これはミューズに祝福された作品ではないでしょうか。

【物語の始まり】

有名ピアニストの息子でエリート音大生の千秋真一（すでにピアノとヴァイオリンはプロ級。専攻はピアノ。両親は離婚し、絶縁状態の父親との間に葛藤がある）の腹は決まっている。「一流の指揮者になる」・・・・だが彼は十一歳の時の飛行機事故のトラウマのため、渡欧できず、日々を悶々と過ごしている。そんな彼の前に突如現れた野田恵（愛称？のため？）。とてもなく変人である彼女は、「ミ部屋に住み、自ら編曲したトーベンの？悲愴？ソナタをカプリチオーソ・カンタービレ（気まぐれに歌うように）に美しく奏で、多大な嫌悪感を覚えながらも、千秋は彼女の音樂性に惹かれていくのだった。

【主題： 身震いするほど感動】

千秋とのだめはモーツアルトの一台のピアノのためのソナタ二長調KV.448を連弾する。その時彼は、？身震いするほどの感動？を覚える。

「昔ヴィエラ先生が言っていた。身震いするほど感動ができる」となんて本当に？まれ？だ、と。オレはそんな瞬間を夢見ながら、昨日まではあきらめていた。でも確かに今、小さな身震いを感じている」「

この作品が大成功をおさめている理由のひとつは、？本物？を描

いている、ということでしょう。

音楽に限らず？本物？というのは大きな感動を与えてくれる。それは時として、人生を大きく変える、変容の翼を与えてくれる。

この「のだめカンタービレ」でも、数多くの登場人物がそんな感動を繰り返し体験し、変容し成長していく様が美しく描かれている。だからこの物語を読んで、クラシックを聞き始めたりピアノを始めたりする人が多いというのもうなずける。

【ミルヒー登場】

四年生になる千秋の元に、思わぬ？朗報（？）？が舞い込む。巨匠フランツ・フォン・ショトレーゼマン（別名、ミルヒー・ホルスタイン）が指揮を教えに来るというのだ。

彼は着任そうそうおかしな行動に出る。選抜された優秀な学生たちによるオーケストラとは別に、もうひとつオーケストラ（Sオケ）を作り指揮するというのだ。それは学内の下手くそと変人をかき集めたかのようなオケだった。千秋はそこで人生初めての指揮をする機会を得たのだが、失敗に終わる。その後ミルヒーが指揮をすると、オケは生まれ変わったように鳴り出すのだった。千秋は言う。

「あの人はきっと、音楽を、人を尊敬していて、それが自分に返ってくる。遙か遠く、本物の巨匠なんだ」

個人的には、この人物設定に最も感銘を受けました。この作品が大成功をおさめた最大の理由のひとつと言えるでしょう。登場当初は本物かどうかも疑われてしまうほど、威厳なくスケベな言動で笑いを振りまく彼が、こと愛と音楽に関しては本物であり、若い一人に多大な影響をおよぼすのです。物語はのだめと千秋の恋愛と成長を軸に展開していきますが、23巻のグランド・フィナーレまで、ミルヒーの存在、言動が通奏低音のように支えています。

【千秋、指揮者】

千秋は「オケを率いて定期公演に出演することとなる。曲はベートーベンの英雄交響曲。ショトレーゼマンの力は借りられない。時間はない。「オケのメンバーはとにかく下手だ。楽譜通りに弾けない。ピッチが狂う、リズムが狂う……鬼と言われようがどんなに反感を受けようが千秋はひるまない。ハード・トレー・ニングで徹底的に鍛え上げ、つよいには楽譜通りに弾けるようになる。だが何かが足りない。

その夜、のだめは英雄をピアノで弾く。毎日聴いていたから覚えてしまった、というのだ。その演奏を聞き、千秋は雷に打たれる。モーツアルトを連弾した時の、？身震いするほどの感動？を覚える。「湧きあがる、はしゃぎまわる、せまつてくる、純粹で計算のない個性」

そして気づく。あいつら（「オケのメンバー）はみんな「のだめ」なんだ、と。そして理解する。なぜ匠が彼らを選んだのか、を。

ここには物語を超えた大きなテーマが含まれている。一般にコンクールや音楽学校で評価されるのは、「楽譜通りに弾く」「学生である。メカニック優先」と言つていいだろうか。だがそういう演奏は往々にして個性がなく、聞いて楽しくない。一方のだめ的な奏者は自己満足に陥りやすく、聞く者を感じさせるも、眞の感動を与えるだけのテクニックがない。

この対立する二つの旋律は、昇華され融合されるものなのだ。

「コンサートの前日、千秋はメンバーに言つ。

「悪いけど、今までの演奏はすべて忘れてくれ。ごめん、オレの勝手で振り回して。でももつとよくできるから。頼むよコンマス」
彼はメンバーを深く信頼することを学んだのだ。こいつらは？喜

び?を表現できるひと。そして彼は一歩ずつ成長していくのだ。

?オレ様?指揮者である彼の、そのどんな弱点や欠点より魅力的なのは、人を受け入れることが出来るところだ。のだめとの連弾でも、ミスを連発する彼女を散々怒鳴り散らし、楽譜通りには弾けるようになつたが完全に萎縮させてしまつたのだけど、本番の時は、「今日は好きに弾いていいぞ」、と彼女の個性を生かす道を選んだ。彼はより困難な道、けれども正に王道を歩いて行くのだ。

【田町の田町たる所以】

そもそもなぜショートレー・ゼマンは桃ヶ丘音大にやつってきたのか。これは現実的には到底あり得ない設定である。作者はここで絶妙のフェイクを入れる。彼は理事長であるミナコ・モモダイラ（通称・ミーナ）に四十年以上前から恋心を抱いていたのだと。

これにだまされた読者は多いのではないでしょうか。私もそうです。『ミック』的にはありかなあ、と思いました。けれど真の意図は別の次元にありました。

病気で休んでいたミーナが大学に現れるやいなや、ミルヒーは眞面目に授業をしオケを指揮し出す。千秋は「オケの指揮を降ろされ、ラフマニノフのピアノ協奏曲第一番を練習するよう命じられる。理事長の前でいいカッコしたいがためにか、と怒る千秋にエリーゼ（ミルヒーのマネージャー）が事実を告げる。

フランスは学生時代ピアノをやつていた。彼の家は裕福で、ピアノでは優秀な兄がいて期待もされず、やる気もなく、色事にも目覚め、たゞつてばかりのどうしようもない状態だった。そんな彼に、ある時学内一のピアノの名手でマドンナのミナコ・モモダイラが語りかける。

「あなたはすごい才能があるわ。そう、指揮よ！　あなたは指揮者

になつたほつがいいわ」

フランツは電撃的に激しく恋におちた。けれども彼女はすでにピアノの才能を認められ、その美貌で世間で有名になりつつあったピアニスト。雲の上の存在になりかけている彼女を追つて、彼は必死に音楽の、指揮の勉強をやり出した。

その後彼女は指の病気につきピアノをやめ日本に帰国するのだが、ショトレーヴマンの今があるのは、本人も言つよつて、ミーナのおかげなのだ。

ショトレーヴマンは理事長に指導者として呼ばれたから日本に来たのだ。彼が弟子を作るなんて、そんなのどんなに頼まれたって一度もないことなのだ、と。

さすれば「オケ」というのは、千秋のために用意されたオーケストラであった、とみていいのではないか。下手、勘違い、自己陶酔などの「ゴミ溜め」の下に隠されている純真な喜びを見つけ生かす、そのためにあつた、と。腕試し、みたいなものか。見事な英雄交響曲を演奏した千秋は次のステップへと進む。（Sオケの何人かも、進化する道を選ぶ。ただ楽しむだけでは、ある程度以上には進めないのだ。千秋も巨匠も抜きのSオケは、文化祭のステージで最後の輝きを放ち、その役割を終え、消滅する）

これは実に？ のだめ？ 的である。そして大学に到着したショトレーヴマンが真っ先に見つけたのも、実はのだめの才能であった。彼は言つ、千秋の他にどうにかしなければならないのがもうひとりいます。

「まるで昔の自分を見ているような、切ない気持ちにさせてくれる困った子デス。おもしろいことになつてくれればいいんですけど」

その頃ミルヒーはのだめに話しかける。将来は何になりたいのか、と。野田恵は、千秋先輩のお嫁さんになつて幼稚園の先生をするの

がこちばんの夢です、と答える。丘匠は言つ。

「のだめちゃん。今のままで千秋と一緒にほいられないよ」

【ただ一度の指揮】

丘匠が音大で指揮するのは一度だけ。千秋との共演で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第一番。（オケは学生選抜のAオケ）この選曲には色々な思いが込められている。弟子のために、のだめのために、そしてミーナと自分自身のために。

もつと指揮を教わりたい千秋に、ショートレーゼマンは言い放つ。

「千秋は四年間この大学でピアノを学んできました。二〇・一です。その集大成を見せる。そして指揮をするのはこの私デス。なにか不満が！？」

「いえ・・・・」

「これはなかなか得ることのできない素晴らしい経験・・・・そして勉強です！半端はこの私が許しません！！！」

発憤した千秋は猛練習をする。講演の直前、控え室で、フランツはぼつり言つ。

「わたしも頑張つてミーナにいいところを見せなきやネ。これで日本ともしばらくお別れですか。

さあ、行きますか。楽しい音楽の時間です」

ミーナ、千秋は確かに預かつた。この子は大丈夫だよ。だって？ 真の感動？を与えられる、ほんものの音楽家だもん。この子の音楽への愛と情熱は、きっとどんな困難をも乗り越えていく。私がそうであつたように。

この演奏には、そんな思いが込められていたのではないだろうか。

このシーンは「のだめカンタービレ」屈指の感動的な場面だ。

終楽章、千秋はこころはづぶやく。

「いやだなあ。もつすぐ終わりだ。もつと・・・教えてほしいことがあつた。もつと聴いて感じていたかつた。この人の音楽を」

目があつたマエストロと、魂の深いところで結びつく。

演奏後ふたりは控え室のソファーに倒れ込み、起き上がれない。千秋は言つ。

「もういい年なんだから、酒とかタバコとか女とか、起きとーにして、長生きしてください」

【Lesson for Nodame】

おそらくは、人生で初の？身震いするほど感動？を体験したのだが、憑かれたようにピアノを弾く。その前にミルヒーが訪れる。「とっても変わったラフマニノフだけどなかなかおもしろいデス。でもそれではオーケストラと合わせられまセーン」

コンサートをやらせてとねだるのために、今ままで無理デスよ、となだめ、

「のだめちゃん・・・もつと音楽に正面から向き合わないと、本当に心から音楽を楽しめませんよ」

恵はその意味が理解できなかつた。今だつて楽しんでいるのだから。けれどこの台詞は物語の中で千秋から、後のピアノの師となるシャルル・オクレールから、繰り返し指摘され、のためにとつて一番こたえる？殺し文句？（厳し過ぎるくらい厳しい、けれど最良のレッスンとなつていく）となる。

【先輩とコンサート】

ミルヒーが去り、千秋がこの日本で何をすればいいのかと思い悩んでいると、思わず朗報が舞い込んでくる。夏に巨匠とともに参加した音楽祭のセミナーで出会つたオーケストラのメンバー達（日本

各地の選りすぐりの精鋭）が、また千秋のもとに集結しそうとこりうのだ。

千秋は「オケでやりかけてショトレイゼマンに取り上げられたブルームスの交響曲第一番を選ぶ。」同じでも田匠の教えが生きてくる。「ブルームスをなめてんじやないです！」。同じとこのフレーズをつなぐ夢見るホルン。キミわかつてる…？六度の和音・・・・第一楽章の「だま。ブルームスは「交響曲」という大きな物語の中で無駄な時間は一切使つてないんです！」

寝食を忘れて没頭する千秋を、のだめは甲斐甲斐しく世話をする。図々しく厚かましく変態な彼女も、実に清らかな愛を表現する。そこに魅了された方は多いんじやないでしょうか。

千秋達は会心の演奏をする。再び？身震いするほどの感動？したのだめは、彼の飛行機恐怖症を癒すのに一役買い、「先輩とコンチエルトを奏てる」という新たな夢を抱き、千秋と一緒にいられるよう、コンクールに挑む。

「ここでひとつおもしろいテーマが出来きます。世の中には、自分ることは話すけれど人の話に耳を傾けない、他人を受け入れない人たち、がいますが、野田恵も同じ傾向を持つています。それは物語の冒頭で彼女の弾いたベートーベン、ピアノ・ソナタ？悲愴？が、原曲を独自にアレンジしたものであることも象徴されています。作曲者がそこに込めた思いを？聞く？よりも先に、自分の言いたいことを？表現？してしまうのです。それはそれで素晴らしいはあるのですが、そのレヴェルにどぎまつていては、「真の調和」を奏でることはできません。

シユーベルトは氣難しい人みたいでがんばって話かけてもなかなか仲良くなれません、とののだめからのメールに、千秋は答える。

「シユーベルトは本当に「氣難しい人」なのか？自分の話ばかりし

ないで、相手の話もちゃんと聴け！楽譜と正面から向き合へよ。

そして恵はめまぐるしく進化していく。

【ミルヒー再登場】

パリに渡つてそうそう、千秋は突っ走る。途中失敗もありながらライヴァルを押さえ、見事コンクールに優勝。そこへミルヒーが現れる。

まだ学校の始まつていらないのだめは、ちゃんと音楽と正面から向き合つていました、と報告するが、ピアノの上につもつた十一日分のほこりに気づき、約一年ぶりだといつのこと、彼女の演奏を聞こうともしない。

そして弟子を連れ、三ヶ月もの演奏旅行に出かけてしまう。彼女へ無言のメッセージを残して。

「のだめちゃん。今ままでは千秋と一緒にとはいられない。もっと音楽に正面から向き合わないと、本当に心から音楽を楽しめませんよ」

旅行中、ミルヒーは千秋に重要なアドバイスをする。のだめちゃんを放置するのはやめなさい。言葉を変えれば、音楽と恋愛感情を分けて、彼女の音楽性を伸ばしてあげなさい。キミはそれを望んでいるのだから。

ショトレーヤマンは、野田恵がパリでどれだけ悩み苦しむか、気づいていたのだ。それは彼自身が自ら体験したことだから。（そしてその先にある？本当の喜び？も）

事実渡欧したのだめを待ち受けていたのは、過酷な試練の連続だった。新学期、のだめは自身の能力の無さを残酷なほど痛感させら

れる。あこがれていた先輩と共演といつ夢は、年下のピアニスト（孫R.U.）に先を越され、アナリーゼの授業ではまったく発言できず、初見の授業では子供笑われ、肝心のピアノのレッスンでは、「こんにちは、ベーベちゃん（赤ちゃん）」、「せんせんダメ」、「君はなにじにこにく来たの」

自身が優秀なピアニストであり、教師としてもまた多くの新鋭を育ててきたオクレールは、恵の才能や可能性や問題点を、本人よりも深く理解していた。（シユトレーゼマンとは少し違う視点から。千秋ものだめも、ほんと師には恵まれてこる）

「君が自作で表現したいことがあるように、作曲者もその曲の中で言いたいことがある。それを君は本能的感覚的にしかどうえていい。もっと楽譜に正面から向かい合いなさい」

【巨匠、夢の共演（？）】

渡欧して一年、マルレ管弦楽団の常任指揮者になつた千秋は、シユトレーゼマンの意向でバッハのピアノ協奏曲第一番の弾き振りに挑む。このプログラムには色々な意味が含まれている。

まず千秋のために・・・自身がピアノ出身である巨匠は、ピアノ音楽をさらに理解することが彼の未来にとって重要なことを知っていた。そして、「弾き振り」はオーケストラとの主体的な協力がより重要になるので、千秋がこのオケと協調的な関係をつくっていく一助になる。そして千秋の音楽的な深さをオケのメンバーに知らしめる、絶好の機会となる。事実彼らは、うちの常任はすごい、と感嘆する。

そしてのだめのために・・・もっとピアノをがんばって、ここまで来なさいよ、と。事実彼女はこの演奏会後、千秋の部屋に入り浸ること止め、練習に励む。より近づきたいがために、離れるのだ。

そしてこのコンサートは予期せぬ第三の効果をもたらした。恵の彼氏が振るといつのでやつて来たオクレールが、のだめが音楽家として生きる決心をしていないことに気づくのだ。彼女のは先輩との共演、それが叶えば、もう十分なのだと。

オクレール先生の指導は厳しく搖るぎない。ただひたすらに多くの作曲家の声を聞くよつに膨大な課題を課す。一例を挙げればバッハの平均律第2巻全24曲をやるなんて、それがどんなに大変なことか、ピアノをよく弾く人なら実感としてわかるのではないでしょうか。そしてひたすらに恵が本当の音楽家・・・音楽と共に生きる覚悟を決める日をじつと待つ。コンクールへの出場は認めない。

【のだめ最大の危機】

最初こそ厚かましさ極まりないといつほどだつたが（おこた事件！）、野田恵の千秋真一に対する想いはとてもピュアである。彼の演奏を聴き、感動する度にその想いはより深く澄んでいくよつだ。真一が一緒に住んでいたアパートメント引っ越す時も、イタリアに通つてオペラの勉強を始めたいと言つたときも、彼女はそつと受け入れる。悲しくないわけないはずなのに・・・。

そんな彼女に最大の危機が訪れる。初めてラヴェルのピアノ協奏曲ト長調を聞いたのだけは、それが自分の分身のように感じ、生涯の夢、先輩との共演はこの曲をおいて他にない、と確信する。大はしゃぎする恵、けれどもそれは、千秋がRumiと共演することがすでに決まっていたのだ。

うちひしがれるのだめを見て、千秋はひとつ決断を下す。イタリアオペラ修行を一時中断し、昼夜つきつきりで彼女の音楽の旅を共にする。

それはこの物語の中で、最も美しい場面のひとつである。ふたつ

の魂がひとつに解けあっていくのだ。千秋の哲学的理知的側面をのだめは受け入れ、彼女の本能的感覚的側面を真一は受け入れていく。互いが互いの音樂性を高め、愛情を育てていく。理想的なパートナーシップであろう。

オクレール先生はその劇的な変化を如実に感じる。「ベーベちゃん」という呼び方を改め、密かに彼女のコンクール出場（そしてその後のプロ・デビュー）の機会を検討し始める。

だがここにさらなる悲劇が恵を襲い、物語はクライマックスを迎える。

「裏切り。意氣消沈。苦悩に満ちた試練。落胆。絶望・・・人の嘆きのすべて・・・最後は疲れ果て、ここにもない」

恵の弾くフーガのないベートーベン、ピアノ・ソナタ大31番、終楽章・・・

彼女の音楽家としての大成を祈つてやまないふたりの巨匠、ショトレー・ゼマンとオクレールの？共演？は、ここでも異彩を放つ。

【巨匠の夢】

野田恵が樂譜の中から作曲家の喜びを見つけ出すことを学んでいったように、我々読者も表面に現れていないストーリーを感じていくのはとても大事なことだと思います。特にショトレー・ゼマンの若き日を想像するのは有益でしょう。

のだが千秋との協奏曲での共演を夢みたように、若き日のフランスがミナコ・モモダイラとの共演を夢見たのは想像に難くない。彼女の演奏家としての命が途絶えたときの、その衝撃はどれだけ激しかつただろうか。そしてその底から、どうして這い上がることができたのだろう。

四十五年の月日がたち、のミーナから優秀な指揮の指導者を

紹介してくれ、といつ手紙を受け取ったとき、彼は自ら直接乗り込んでいく。そして自身の昔の恋の変奏曲^{バリエーション}のよつな、のだめと千秋に巡り会い、どんなにうれしかったことだらう。

自らの人生が終わりに近づいている（聴力が衰え始めていた）のを自覚していた巨匠は言つ。

「もう少し生きられそうだから、見たいんだよ。早く・・・

かわいい娘の晴れ姿。美しい音が聴こえるうちに」

ショパンのピアノ協奏曲第一番ホ短調・・・もちろんこれをのだめが違った個性で美しく奏でることを見抜いた上での選曲であろうが、これが若き日のフランツがミーナとの共演を夢見た曲のひとつであることに間違いない。約半世紀に渡る長い年月が過ぎ、ショパン自身が、

「浪漫的で静穏。ながば憂鬱な気持ち。美しい月明かりの夜。楽しい無数の追憶」

と記したこの曲を、のだめは、

「昔の恋・・・・・あの人を想つ夜・・・・・楽しくて切なくて・・

・・怖いもの知らずだったあの頃・・・・・」

と切り返す。ああ、ボクにもあったね、そんな頃が・・・・巨匠は和す。叶えられなかつた夢・・・・けれどそれは形を変え、再び目の前に現実のものとなつてやつてくる！

演奏終了後、フランツはつぶやく。

「生きててよかつた」

ミーナとの共演の夢を絶たれた青年は、死をも覚悟するほど絶望の淵に陥つたのではなかつたか。

【グランド・フィナーレ】

パンダリカの神話をながらに、物語は？希望？で終わる。

あの時の恵の弾けなかつたフーガ・・・・すべての悲嘆を一掃する高揚感。

「いくら苦しくても、気が遠くなるような孤独な戦いが待つていようど、こんな喜びがあるから、何度も立ち向かおうと思えるんだ

それを奏でるのは、読者のひとりひとつなのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2240q/>

のだめカンタービレ雑記～書かれなかった物語、ミルヒーの視点から

2011年1月19日00時15分発行